邂逅

「ラインハルトさまは無茶が過ぎます」
　ラインハルトの左腕に巻いた包帯を取り替えながら、キルヒアイスはこれで何度目、いや何十度目になるか分からない言葉を口にしている。
「もう言うな、キルヒアイス。無茶だったことは、実際にあの場に立った俺の方が骨身に滲みて感じているのだ。あまり愚痴られると、耳にたこができてしまうぞ」
「たこができるくらいがちょうど良いんです、ラインハルトさま。でないと、また無茶をなさる。ラインハルトさま、お一人のお命ではありません。無用の冒険は慎んでいただかないと、わたしがアンネローゼさまに申し開きができません」
「わかった、姉上にはわたしが自分でお詫びをする。お前が止めてくれたことも、アドバイスをくれたことも。だから、もう説教は止めてくれないか」
「今日はこの程度にして差し上げます。あとは明日にさせていただきます」
「え、明日もあるのか？」
　やや情けない口調になったラインハルトに、キルヒアイスはくすりと笑う。ラインハルトのこんな一面を知ることができるのは、確かに彼にだけ与えられた特権に違いない。

　帝国暦四八三年一月。ラインハルトは、その生涯でも滅多にない経験……負傷療養……を体験している最中だった。負傷は二カ所。左腕前腕の盲管銃創と、左胸から右脇腹に近いあたりまでを切り下げられた刀傷である。
　左腕を傷つけた弾丸は、手首に近い骨で止まり、主要な血管を傷つけるには至らなかった。軍用の熱線銃ならそのまま心臓を貫通して、ラインハルトを即死に至らしめただろうきわどい位置への銃創だった。
「人間の手首の骨は、骨の中でも最も硬いのだよ。火薬の量がすくなくて弾丸が低速だったから、骨を貫通できなかったわけだ。それと弾丸が軍用の鋼鉄製だったから、骨に食い込んだだけで炸裂せずに止まってくれた。これが鉛だったり、銀だったりしたら骨は無事でも前腕部の皮膚と筋肉は吹き飛んでいただろうね。そうなったら切断して義手に換えるしかなくなっていたところだ」
　医者の言葉はキルヒアイスに安堵と同時に恐怖を呼ぶに十分だった。目前でラインハルトの腕が吹っ飛ぶ光景を見るくらいなら、自分が身をもって弾丸を受け止める方がどれほどましか分からない。本心から彼はそう思うのだ。
「ええ、明日もあります。わたしを心配させた罰だと思ってください。わたしの気が済むまで、たっぷりお説教させていただきますからね、覚悟していてください」
「悪かった。決闘がどういうものか知っていたら……」
「受けませんでしたか？」
　わざと意地悪く反問すると、ラインハルトは困ったように顔を背けてしまった。

キルヒアイスには分かっていた。たとえ決闘というものがどういうものか、いわゆる『決闘者』なる者がどのような存在なのか、事前に知っていたとしても、シャフハウゼン子爵やヴェストパーレ男爵夫人の懇請を無下に退けて、ラインハルトは我が身一人の安泰を図ったかどうか。

だが、それでも決闘など受けるべきではなかった。それがキルヒアイスの結論である。ヴェストパーレ男爵夫人はアンネローゼの宮廷での貴重な味方であり、シャフハウゼン子爵夫妻もまたアンネローゼの数少ない友人である。が、彼らを守るためにラインハルトが生命を失ってしまっては元も子もないではないか。

もし、ラインハルトが道半ばにして斃れたとしたら自分はどうするのか。既に少尉の階級を得て帝国軍士官となった以上、許可なくして軍を退くことはできない。ラインハルトを喪ってしまえば、彼はラインハルトならざる同盟との永久運動にも似た戦いの中に身を投じ続けねばならないのだ……考えようとしてキルヒアイスは途中で思いを放棄する。冗談ではない。ラインハルトは生きている。生きているのだから、彼亡き後など考える必要はないではないか。

「……やはり受けたかも知れないな。ただ、その時はもっと練習するか、準備を整えてからにするだろうけどな」

キルヒアイスは再び笑った。これあるかな我が金髪の親友（とも）……である。

弾丸の摘出手術を受けた銃創はもうすぐ抜糸できそうだったし、胸の傷も塞がって新しい皮膚が傷口を覆いつつある。若いだけに回復も早い。この分では細胞賦活剤の塗布も必要なさそうだった。

帝国暦四八三年一月、ひょんなことからシャフハウゼン子爵とヘルクスハイマー伯爵との間の流体金属鉱山利権争いに巻き込まれたラインハルトは、子爵の代理人として利権の帰趨を定める決闘に赴く羽目となった。ヘルクスハイマー伯爵はその道の専門家である『決闘者』なる人物を決闘場へ送り込んできており、その『決闘者』の放った弾丸と刃が、ラインハルトを初めて負傷せしめた。

決闘そのものは『皇帝陛下の御裁定』により引き分けとなり、シャフハウゼン子爵とヘルクスハイマー伯爵は流体金属鉱山利権については折半するという条件で和解することになっている。本来、子爵が私財をなげうって開発した鉱山であり、ヘルクスハイマー伯爵が権利を云々できる立場ではなかった。伯爵は『皇帝陛下の御裁定』に地を蹴りつけて激昂したと言うが、ラインハルトはこう評している。

「特権に溺れて、厚かましさと自己主張の境目が見えなくなると、ああいう尊大きわまる男ができあがると言うことか。門閥貴族というのは、すべからくああいうものか」

とは言え、ラインハルトにとっては生まれて初めて『勝てなかった』相手との邂逅であり、ここのところちょっと表情が冴えないのも、それゆえなのだろうとキルヒアイスは推測しているのだ。

「あの『決闘者』を名乗った男の前に立ったとき、死の匂いがどんなものなのか、初めて分かったような気がしたぞ、キルヒアイス。どこかに行ってくれて幸運だった。二度と会いたくないが、あんな男が他にも大勢いるのなら厄介だな」

珍しく弱気な述懐を口にしたラインハルトである。
負傷そのものはヴェストパーレ男爵夫人の手配で信頼できる医師が治療に当たってくれ、その後も継続して容態を見守ってくれている。おとなしく入院して寝ているようなラインハルトではなかったし、キルヒアイスからすれば、たとえ男爵夫人の全幅の信頼を受けている医師の病院であっても、基本的に出入り自由な病院である。そこにラインハルトを一人置くのには不安を拭いきれなかったのだ。特に、件の『決闘者』の所在が不明なことも、キルヒアイスに警戒の念を呼び起こさせるに十分だった。
『決闘者』なる男の素性については、キルヒアイスも手の及ぶ限り調べては見たが、はっきりとしたことは分からなかった。帝国の貴族社会の陰に潜んで、密かな需要の許に決闘の代理人を供給する組織、あるいは複数の個人がいる。彼らは単に決闘の代理者となるにとどまらず、さらに陰惨な、例えば暗殺をも請け負っている。決して証明はされないが、貴族社会での都市伝説とも言うべき噂が根強くささやかれ続けていたのだが、彼らにとって少数の貴族社会の友人たちは、残念ながら、その噂以上の見聞には欠けていた。
ということで、ラインハルトはリンベルク・シュトラーセの下宿で自宅療養の身となったのである。
「ではラインハルトさま、行って参ります」
包帯を取り替え終えたキルヒアイスが外出準備を整えた。ヴェストパーレ男爵夫人の顧問医師を訪ねて、傷の状況や次回の往診の日程を決めると共に、日々のケアのための医薬品を受け取ることになっている。キルヒアイスは幼年学校と、その後の短い軍務期間の間に野戦衛生兵相当の基本資格を取得していた。傷口を消毒して所定の医薬品を噴霧、あるいは塗布して包帯を巻き直す程度のことだが、今のラインハルトにはそれくらいの手当で十分だった。
「ああ、気をつけて行ってこい。わたしは本でも読んでいるから」
「正午過ぎには戻れると思います。昼食はフーバー夫人がご一緒にどうかと言っておられましたから」
ラインハルトはあからさまに顔をしかめた。
「早く帰ってきてくれ。フーバー家の歴史ならもう十分に拝聴したぞ」
「大丈夫です。まだ、クーリヒ家の歴史が残っています」
「この……つべこべいわずにさっさと行ってこないか！」
「はい、では良い子にしていてください」
子供扱いにするな……とでも叫んでいるらしいラインハルトの声を背にドアを閉めると、キルヒアイスは足早に階段を下りる。階下のリビングにいる家主の二人の夫人に声をかけると、彼は下宿を歩みでた。
リンベルク・シュトラーセは帝都の中央近くに位置している。帝都郊外にあるヴェストパーレ男爵夫人の邸宅近くまでは公共交通機関を使って一時間ほどだった。
帝都は首都星オーディンの温帯域に位置するが、緯度そのものは比較的高緯度に属する。西方に広がるフロイデン山系から南南東へ長く伸びた山稜が、緩やかに東への弧を描きながら南方の海洋に落ち込んで作りだした巨大な半島弧が、赤道上から暖流を帝都の近海まで導き上げてくることで、帝都の冬はその厳しさを和らげられていた。暖流は、冬の帝都に暖気と共にある程度の湿潤さをもたらし、結果として帝都の冬は白く彩られることが多い。

この日も、帝都の空は積雪を予感させて低く、濃い灰色にたれ込めて、太陽（ヴァルハラ）からの日差しの恩恵を遮っていた。気温も高くない。降り出したら、かなりの積雪になるに違いなかった。

ラインハルトではないが、さっさと行って帰ってくるに限る。コートの襟を立てたキルヒアイスは、律動的なその歩みを早めた。

☆☆☆

キルヒアイスがその少女の姿を見たのは、ヴェストパーレ男爵夫人邸から幾らも離れていない森の外れだった。

海洋沿いの広大な洪積平野に沿って発展するとともに、不定形に向かって内陸に伸びた帝都の街区が、フロイデン山系の北東から南東に広がる巨大な面積を覆う山麓の勾配と初めて出会うあたりが帝都の郊外区画をなしている。帝都の街並みや交通網と山麓の自然とが絶妙に入り交じった高級居住地域であり、大貴族や平民の富裕層が好んで邸宅や別邸を構える一帯でもある。

それゆえ、視界に入るのはいずれも広壮な宮殿を思わせる邸宅ばかりであり、そうでなければどんよりとした日差しの下で、濃緑の針葉樹の森が黒々と蟠（わだかま）っているのだ。人通りは、あるにしても希であり、行き過ぎる人々にしてもいずれもが明らかにこの一帯の住民らしく複数の従者や、時に巨大な飼い犬を従わせている。午後からの降雪を予感させてじりじりと気温が下降していく天候に、わざわざ散歩を楽しもうとする酔狂な住民が多数派を占めるはずもない。キルヒアイスが病院を辞した時にはすでに、降雪の最初の一波が地表に達しようとしており、街路からは拭い去ったように人影が消えていた。

「車を出しましょうか」

ヴェストパーレ男爵夫人は、キルヒアイスが病院を訪ねるときは、なぜか『偶然』に居合わせるのが常だった。

「この雪はひどくなるわ。少し待っていてくれれば、車で送らせるわよ。荷物があるのに、冬に降られたら難渋するから」

好意からの申し出とは分かっていたが、キルヒアイスは何となくこの男勝りの貴婦人が苦手である。緊急の場合ならともかく、日常においてまでこの貴婦人の世話になるのはどうにもご免被りたいのがキルヒアイスの本音だった。ラインハルトなどが知れば、『そうか、キルヒアイスにも苦手がいるんだな』などとからかうだろう。

「いえ、大丈夫です。大した荷物ではありませんし、雪なら戦場で慣れてきました」

「あら、可愛くないことを言うのね」

カプチュランカの雪は雪などと言う可愛い代物ではなかったが――取りあえず、そういう言葉で相手の好意に謝絶を示し、キルヒアイスは街路に歩み出たのだ。

公共交通機関網が伸びてきているとは言え、そこは大貴族の住む高級住宅街区である。大貴族たちが出仕に地下鉄やバスを使うはずもないから、最寄りのステーションはヴェストパーレ男爵夫人邸からでも二キロ余りほども離れていた。鍛えられたキルヒアイスの脚にとって苦になるような距離ではないし、それに彼は雪の中を歩くのが好きだった。特に、この街区のように高い建物が一切ないあたりでの降雪の中を。

一キロほど歩くと、敷地の間に広がる針葉樹の森がある。大半はヴェストパーレ男爵夫人邸の敷地であり、わずかに幾つかの貴族の領有地が入り交じっているらしい。さして急ぐでもなく、しかし、その長身と鍛え抜かれた体躯のゆえに幅が広く、制御の行き届いた歩調に、踵が舗道を打つ音が律動的に響く。

キルヒアイスは空を見上げる。薄暗い灰色に染まった曇天を背景に、無数の小片がより濃度の高い灰色を帯びて舞い落ちてくる。歩みを止めれば、舞い降りてくる小片は、視界の上から下へ、わずかに左右に振れながら通りすぎて行く。じっと視線を据えていると、周囲を取り巻いた雪片の中をどこまでもどこまでも上っていくような感覚に、身体がふわりと宙に浮いていくような錯覚に襲われる。

彼が、雪の中、一人往くのを好む理由がそれだった。雪の日には空を翔べる……アンネローゼにそんなことを話して、二人で雪の空を見上げたのは、あれは何年前のことだっただろうか。

不意にキルヒアイスは地上に引き戻された。

「――!?」

最初は錯覚かと思った。余りに長いこと……と言っても実際には数分だっただろう……雪の中を舞う幻に身を委ねている内に、本当に幻覚が現れ出てきたのではないか、そんな思いに囚われたのだ。

キルヒアイスは何度か目を瞬かせた。彼を地上に引き戻したのは、人影だった。人の住まう地域であってみれば、人影があることに不思議はない。しかし、戦場での経験でそれなりの鍛錬を経たはずのキルヒアイスにさえ、その気配を感じ取らせずに、視界の中に存在を主張できる距離に近づけた人間がいたことに、彼は驚いたのだ。

護身用に内ポケットに仕舞ってある熱線銃に手を伸ばしかけ、キルヒアイスはその手を止める。細い声がその聴覚を打ち、視覚が幻覚の中にあるのではないことを告げた。

「そなた、このあたりの者ですか？」

繊細な、鈴をふるわせるような声。アンネローゼの声にやや似ているような気がしたが、これは錯覚だったかも知れない。アンネローゼの、繊細で澄明でありながらも硬質な宝玉を思わせる靭さを内に秘めた声に較べると、この声は余りにも繊弱さと不安定さに満ちていた。

銃に伸ばしかけた手を止め、キルヒアイスは数メートルの距離を隔て、佇む人影に目を凝らした。

「わたしはジークフリード・キルヒアイス。帝国軍少尉です」

キルヒアイスほどの観察眼の所有者でさえ、一瞬、その人物の輪郭を見て取り損ねて、改めて目を凝らしたほどに希薄な存在感。

白と黒……光の澄明と闇の漆黒。それが、第一印象だった。早くも雪の衣をまとい始めた地表と、森の木下闇（こじたやみ）とに半身ずつの背景を委ねた、その人物は頼りなく揺らめくように、森の端に立っていた。

縁取りのついた白い毛皮（ファー）のコートが膝丈までを覆い、こんな天候にはふさわしくない華奢な黒い革靴を履いた足許に向かって白いストッキングの脚が伸びていた。やはり縁取り付きのフードを背にはねのけた貌は透き通るように白い。眉のラインで綺麗に切り揃えられたのは、癖のないまっすぐな漆黒の髪。結いもせずに背に流した長い黒髪が、風をはらみ始めた雪の中にはためくように舞い踊

る。ラインハルトにも劣らぬほどの白皙の中、輪郭のはっきりとした眉と、その下の瞳もまた漆黒だった。
「あなたこそ、どなたですか、フロイライン？」
明らかに女性。それも、彼自身と余り年齢の変わらない一〇代半ばから後半くらいの少女……キルヒアイスはそう見て取った。場所柄、近くに屋敷なり別宅なりを構える貴族の令嬢に違いない。
そう思いつつ、キルヒアイスはわずかに首をかしげる。その顔立ちには明らかに彼の記憶を刺激する何かしらがあった。一目見れば忘れられないほどの美女というわけではないから、この少女に会ったとは思えない。ただし、キルヒアイスの場合は『美女』の基準がアンネローゼなのだから、これは帝国に住む女性の過半にとって甚だしく厳しい基準に違いない。
「ジークフリード・キルヒアイス……帝国軍少尉？ ここがどのあたりか、教えてくれますか？」
古風な言葉遣いだった。同じ帝国公用語でも、ごく一部でしか使われない、古帝国語に近い。その言葉遣いが少女の身元を告げている。キルヒアイスはそう思った。古帝国語に近い帝国公用語の使われる地域、それは帝国でも一カ所しかない。新無憂宮……つまりゴールデンバウム王朝の宮廷である。つまり、この少女は紛れもなく貴族の娘で、それも宮廷に出入りするような身分の大貴族ということになる。
「このあたりは、ヴェストパーレ男爵夫人の御領地です。友人が怪我をしたので、その薬を男爵夫人の侍医の方に頂きに来たんです」
娘の顔に微かな喜色が宿ったように見えた。
「では、そなたは男爵夫人から知遇を頂いている者なのですか？」
「ええ……」
知遇と言えば知遇である。否定する必要はない。
「それよりフロイライン、今日はこれから雪が強くなると聞いています。フロイラインのような方が一人で出歩かれるような天気ではないです。早くお宅にお戻りになった方が良いです」
「そなた、爺と同じように言いますね」
淡い色合いの唇を綻ばせて、少女は笑った。いかにも愉快そうなのが、キルヒアイスの戸惑いを強くさせた。幼年学校では多くの大貴族の子弟と会ってきた。その多くが、あのコンラディン・フォン・ヴィンスティンゲンのような連中だった。いつのほどか、貴族やその一族というのはああいうものなのだ。そんな固定観念に似たものをキルヒアイスは抱くようになっていたし、戦場に出てから出会ってきた大貴族の出身者は、そんな彼の概念を補強しこそすれ、裏切った例はほとんどない。ヴェストパーレ男爵夫人やシャフハウゼン子爵夫妻を除けば……『ハーメルンⅡ』のあの伯爵艦長は、確かに高位の貴族一般への、キルヒアイスの視点を大きく修正する存在には違いなかったが。
言葉こそ貴族的で、やや権高な印象は皆無ではない。が、第一印象からすれば、この娘は例外の方に入ると言っていい。
その間も降雪はさらに繁くなり、足を止めているキルヒアイスの肩にもいつの間にか薄く白い層ができはじめている。少女の黒髪も、既に半ばは雪の白さに取って代わられかけているのだ。
「申し訳ないですが、フロイライン。わたしも用事がありますし、フロイラインもこんなところに立っておられては、風邪を罹きます。

お送りしますから、お宅を教えていただけますか」
　また、キルヒアイスのお節介が出た……ラインハルトのあきれたような言葉を胸の内に反芻しながら、キルヒアイスは肩を竦めている。確かにお節介だし、高位の貴族の娘が勝手に屋敷を抜け出してこんなところをふらついているのなら、今頃、この少女の自邸では上を下への大騒ぎだろう。下手に見捨てては、後で思わぬ災難が降りかかってこないでもない。
　ふ、と少女の表情が曇った。心配気にキルヒアイスを見上げてくる黒瞳が震えていた。
「迷惑なのですか、ジークフリード・キルヒアイス？」
「迷惑ではありませんが、ここでゆっくりとお話ししていられるような天気ではないですから」
「それは分かっていました。こんなに雪が降るのは、わたしも初めて見ました。帝都は寒いのですね」
　キルヒアイスは戸惑った。
「帝都には初めてなんですか？」
「帝都にきたのは、半年ほど前。それまではラキェンテスにいました」
　帝都南西にある有名な避寒地の名を、少女は挙げた。
「帝都の冬の寒さは、わたしの身体に悪いと言われて、ずっとラキェンテスで過ごしてきました……でも、どうしても、今年は帝都に来なければならない、父上にそう言われて帝都に来ました。確かに寒い。爺が言った通りです」
「病気……なんですか」
　キルヒアイスの声が真摯な響きを帯びたのを聞き取ったのだろう。少女の顔が半分泣き出しそうに歪んだ。
「済まない。我が儘は分かっています。でも、どうしても、雪というのを見たかった。爺たちが、今日の午後は雪になると話しているのを聞いて、ついふらふらと出てきてしまって……雪が降るとこんなに寒くなるなんて思ってもいなかった……寒い……」
「まさか、道に迷った？」
　少女は半べそをかくように表情を歪め、こくんと頷いた。
「ふらふらと歩いて来てしまって、気がついたらここにいました。ここがどこなのか分からなくなって、そうしたらそなたが通りかかってくれた」
　キルヒアイスは慌てた。こんなところで貴族の、それも病弱そうな少女を泣かせているところなどを近隣の住民にでも見られたら、どんな災難が降りかかってくるか知れない――のだが、それがキルヒアイスのキルヒアイスたるゆえんだっただろう。我が身の被るだろう火の粉よりも、今はもう雪嵐に近いような有様になった天候の中、どうやら極く簡単な防寒具しか身につけていないらしいこの少女をどうやって無事に自宅に帰り着かせるべきか。この時の彼の胸裡を占めていたのはそちらの方だったからだ。
　慌てて駆け寄ると、既に少女は唇まで紫色に変えて震え始めていた。透き通るほどに白い肌が氷をまぶしたように透明な白さに変わり、それが髪や瞳の黒さとのコントラストを不吉なまでに際だたせる。
「大丈夫ですか、フロイライン」
「寒い……」
　着ていた軍用コートを脱ぎ、少女を頭からすっぽり覆うように

着せかける。コートごと、その身体を抱えてやるとまるで風に吹かれる木の葉のように震えているのがはっきり分かった。
「ごめんなさい……」
キルヒアイスの腕に抱えられながら、少女の声がますます細く小さく震えている。既に立っているのもやっとなほどに身体が冷え切ってしまっているらしかった……と言うより、既にこの森の端まで歩いてきただけで体力の大半を消耗してしまっていたに違いなかった。
キルヒアイスは胸ポケットからPDA（ケータイ）を取り出し、ヴェストパーレ男爵夫人の侍医の病院を呼び出した。
既にヴェストパーレ男爵夫人邸からも一キロ余りは歩いてきている。直接連絡するすべこそ知らないが、あの病院なら連絡の手段は幾らもあるのだから、男爵夫人へ支援を請うのは難しいことではない。キルヒアイスの体力なら、彼の半分も体重のなさそうなこの少女を背負って男爵夫人邸まで辿り着くのに三〇分もかかるまい。だが、腕の中で震える少女の様子には、その三〇分すら命取りになりかねないのではないか――そう危惧させる脆さがあった。
男爵夫人はまだ病院にいたようだった。電話口に出た侍医の秘書に状況を伝えると、すぐに声が変わった。
『どんな娘（こ）なの？』
「一五、六歳くらいで、身長は一六〇センチに届くか届かないくらいです。目と髪の色は黒で、白い毛皮のコートを着ています。半年前まではラキェンテスにいて、帝都の冬は初めてらしいです。男爵夫人のことは知っているようでした」
『そう――』
わずかに息をのむような響き。男爵夫人は、この少女の身許に心当たりがあるのかも知れない……と思う間もなかった。
『分かりました。すぐに車を出します。一〇分もかからないと思うから、その娘をできるだけ暖かくなるようにしてあげて。身許には心当たりがあるから、私の方から連絡を取ってみます。宜しくて、ジークフリード・キルヒアイス？』
「ええ、分かりました。よろしくお願いします」
『あなたに、よろしくお願いします……と言ってもらえるのは中々良い気分よ、ジークフリード』
「は――？」
『いいの。では、待っていなさい。とにかく暖かくしてあげるのよ。あなたが凍えても私が温め直してあげるから、心配しないでよくてよ』
え――と聞き返す間もなく通話が切れる。自分が凍えたら温め直してくれるとはどういう意味だろう。冷凍のレトルト食品でもあるまいし、凍えた人間をどうやって温め直すというのか――などと言う疑問を繙（ひもと）いている暇は確かになかった。
少女がにわかに身体を二つに折って激しく咳き込み始めたのだ。滅多にないことだが、さすがにキルヒアイスも狼狽（うろた）えざるを得なかった。幾ら急激な寒さに襲われたからと言っていきなり風邪を引き込んで咳き込むということはないだろうが、それにしても少女の咳き込みようは激しすぎた。身体を二つに折り、腰から上半身を丸め込むようにして両手を胸に当てて咳き込み続ける。今にも血を吐

くのではないかと思わせるほどに続けざまに咳き込む、その背を最初は恐る恐る、その後からは懸命にさすってやるのだが、咳はいっこうに収まらない。ばかりか酷くなる一方で、みるみる少女の顔からは血の気が退いていく。透き通るような色白さだけに、無機質で透明な大理石を思わせるような白さに、その肌が透けていくのが、キルヒアイスの背にも冷たいものを走らせた。

『とにかく暖かくしてあげるのよ……』

ヴェストパーレ男爵夫人の言葉が脳裏に蘇り、キルヒアイスは少女の背にかけてやっていた彼の軍用コートと、彼女自身が着込んでいたコートを一度脱がせた。案の定、コートの下は夏用とさして変わらない薄手の部屋着だった。少女のコートと軍用コートをひとまとめにして被り……少女用のコートはキルヒアイスの長身には小さすぎたが……咳き込み続ける少女の細い身体を腕の中に抱きかかえる。要するに、少女を抱きしめた上から二枚のコートを蓑虫よろしくすっぽりと被ったような格好になったのだ。

「……あ……たた……かい」

身体を海老のように曲げて苦しみながら、それでも少女が小さくつぶやくのが聞こえた。冷え切っていた身体が少し温まったせいか、咳が小やみになり、身体の震えも少しずつ収まってくるようだった。

「フロイライン？」

「……ごめんなさい……少し、暖かくなって……きた……ありが……とう」

少女はそのまましっかりとキルヒアイスにしがみつき、顔をその胸に埋めるようにして、なおも切れ切れな咳はいっかな止まりそうになかった。都度、黒く艶のある真っ直ぐな髪が揺れ、立ち上った柔らかな香りがキルヒアイスの鼻孔をくすぐった。

驚きとも狼狽とも付かない小さな衝撃に、キルヒアイスが思わず顔を上げたとき、白い壁を切り裂くようにして地上車のライトが近づいてくるのが見えた。

「危ないところでしたな」

治療室から出てきた男爵夫人の侍医は、大きくため息をついて見せた。

「もう一〇分も、この吹きさらしの中に立たせておいたら呼吸ができなくなっていたでしょう。もし少尉が、あの子を背負って来られたとしても、手遅れになっていた可能性もありますよ」

「そんなに酷（ひど）い病気なんですか？」

「酷い病気とも言えるし、そうでないとも言えるわね」

キルヒアイスと共に待合室……と言うよりも応接室と呼ぶにふさわしく瀟洒（しょうしゃ）にしつらえられた部屋である。ソファに身を沈めていたヴェストパーレ男爵夫人が、手にしていた扇で軽く左掌を拍った。

「先天性の呼吸器系障害なのよ。癌と同じで、もう何百年も前に克服された、つまりね、それで死ぬことは滅多にない。そういう病気よ」

キルヒアイスは眉をひそめる。理解できない。既に克服され、死ぬことのないはずの病気で、どうして貴族の娘らしい少女が危う

く死にかけると言うことがあり得るのか――そこで、彼は思い当たった。男爵夫人は『先天性の』と言わなかったか。先天性の、つまり……半分音声になりかけた言葉を、慌てて飲み込む。それを言語として発すること、すなわち許されない不敬を意味する。

「治療法が伝えられていない、ということですか」

「いいえ、治療法はちゃんとあるわよ。だから、彼がきちんと治療してあげることができたわけだけれど……分かるでしょ。あの娘が貴族でなくて、ここが私の侍医の病院でなかったら、あの娘は救からなかった……かも知れない。そういうことね」

「治療自体は、間に合いさえすれば非常に大変と言うわけではないのですよ、少尉。たとえば、末期になってしまった癌などとはちょっと違います」

癌が克服されたとは言っても、それは極早期発見技術の発達と、初期から中期にかけての内科的・外科的な治療法の発達によるものだ。末期まで進行し、主要臓器の機能を完全に冒されてしまったようなケースでは治癒不可能である場合もあるのだ。特に悪性の脳腫瘍などが、それにあたる――一くさり、医療技術の蘊蓄を述べてから、侍医は顔をつるりとなで上げた。脱線したことに気づいたらしい。

「ま、そういうことです。治療は難しくはないし、使う薬剤も高価とは言えません。ごくありきたりのものですが、この種の病気を治療すること、それ自体が禁忌に近いのです」

ある時点で、遺伝性の疾病を根絶……ルドルフが採ったようなおぞましさを極めた手段によって……したとしても、長い年月の内に一定の確率で遺伝子情報の変異は起こり得る。それがたとえ、大帝ルドルフによって『選ばれた人物』の子孫であったとしても、彼らが『高貴な存在』であるのは単なる人の取り決めであって、何ら自然の法則を左右するものではないからだ。

ゆえに、貴族にもこの種の病気を持った子供は生まれ、その治療への需要は存在する。平民であれば治療を拒否されても、貴族であれば密かにその治療を行うことは許されている。キルヒアイスはそう理解したし、実際、その通りだった。

「――それで、彼女の身許は分かったんですか？」

これ以上、この話題を続けることの危険さを、キルヒアイスは思いやった。悪名高き『劣悪遺伝子排除法』が有名無実にはなっているとしても、それがゴールデンバウム王朝銀河帝国の『祖法』であることに違いない。いかに言葉を選んだとしても、この話題を続ける限り、会話は必ず禁忌に触れる。この侍医にしても信頼は置ける人物ではあるだろうが、不敬の罪を問われたとき、自らの生命と財産でキルヒアイスとラインハルト、ひいてはアンネローゼの生命を贖ってくれるはずもない。

男爵夫人が頷く。察したらしかった。

「シュトレーメル伯爵令嬢フローラ。それがあの娘の名前と身許。ことし一七かひょっとして一八になるのじゃなかったかしらね。あなたより、一つか二つ、年上よ」

「シュトレーメル伯爵家？」

赤毛の頭の中で小さく火種が弾けて、さして古くもない記憶が瞬くように閃いた。フロリアン・ゲールハルト・フォン・シュトレーメル。幼年学校での彼らの同級生は伯爵家の出身であり、姉が一人いたはずではなかったか。彼らの父の名はセバスティアン。偶然に

も、ラインハルトの父と同じ名前だった。
「セバスティアン・フォン・シュトレーメル伯爵の？」
「そうよ。よく知っているわね。もう貴族年鑑からも名前を削られそうになっているほど、帝都の社交界からは姿を消して久しい一家だけれど」
伯爵家の唯一の荘園は、男爵夫人邸からほど近い一画にある。広いことは広いが、単なる草原と丘陵地帯であり、その中に古い居館が一つあるだけで、伯爵家の財政を支えるような収入を約束できるような代物ではなかった。敢えて没落貴族とはいわぬまでも、三〇年余りにわたって官職からも、それらに伴う利権とも無縁であり、帝都に居館と、この荘園を保つだけの伯爵家である。どのようにして伯爵家としての体面を保っているのか。
「帝都の七不思議の一つと言われているわ。セバスティアン卿も、伯爵家の中興の祖になるような人物には見えなかったから」
周囲の偏見と蔑視をよそにアンネローゼとの親交を憚らない男爵夫人である。一応の隣家として、セバスティアン・フォン・シュトレーメル卿と友誼をかわすことに躊躇いを覚えることもなかった。ただ、その男爵夫人ですら、セバスティアン卿への観察は好意的にはなり得なかったらしかった。もっとも、キルヒアイスにはセバスティアン卿その人の人物像には興味も関心もないが――
「じゃあ、彼女はその荘園から？」
「多分ね」
近いとは言っても楽に三キロはある……途中は単調な林と丘陵、草原の繰り返しだから、あの娘……フローラが、伯爵家の荘園へ向かう道と信じてとんでもない方向へつま先を向けてしまったというのも十分にうなずける話だった。
「それで、フローラとは話ができそう？　伯爵家に連絡を取ってあげないといけないから」
「もう落ち着いていますし、長くなければ大丈夫です」
「あの、男爵夫人……」
『連絡』の単語がキルヒアイスにラインハルトを思い出させた。フローラを、男爵夫人の地上車でこの病院に運び込んでから既に三時間近く。ラインハルトには昼前までに戻ると言い置いて出てきたのに、すでに午後も二時を回っている。
連絡を取るところがある。キルヒアイスの言葉に、男爵夫人は頷いた。
「あなたの金髪のお友達でしょう？　連絡してあげなさい。きっと心配しているわよ」
「はい――」
「でも、そのまま帰ってはだめよ。すぐに帰って来いって言われてもね」
「え？　――しかし……」
「世話をしたなら、最後まで面倒を見てあげなさい。フローラにしても、礼も言わない内にあなたに消えられては困ってしまうはずよ。あの娘が生命の恩人に礼も言わないような、そんな礼儀知らずでないことは、私がよく知っているから」
案ずるより産むが易しというのか――ラインハルトは、中々

帰ってこないキルヒアイスに、それでも気を揉んでいたらしい。映話に出たキルヒアイスを前に、蒼氷色の瞳はかえって安堵の光を浮かべたように見えた。

『いかにもキルヒアイスらしいな、そんなところで人助けをしているなんて。それにしても、見知らぬ男に自分から声をかけてくるなんて、貴族とも思われないな。それとも、よほどお前が無害に見えたのかな？』

そうは言っても待たされたことにむくれてはいるらしい。ラインハルトの皮肉を、キルヒアイスはさりげなく無視した。

「あと一時間くらいでここを出られると思いますから、夕食までには帰れると思います」

『わかった。フラウ・フーバーにはお前の分も用意してもらえるように言っておく』

「お願いします」

『待たせた罰だぞ、今夜のクーリヒ家の歴史拝聴役はお前の番だからな』

苦笑して、キルヒアイスは頷いた。たっぷり聞いて、あとでお話しして差し上げます。半ば顔をしかめて、ラインハルトは映話を切った。

診療室隣の応接室へ戻ると、男爵夫人が待っていた。

「フローラがあなたにお礼を言いたいそうよ。すぐに伯爵家の人間が迎えに来るそうだから、時間は取らせないわ。それともヘル・ミューゼルから、すぐに戻って来いって命じられた？」

「ラインハルトさまはそんなに物わかりの悪い人ではありませんよ、男爵夫人」

「おやまぁ、親友には甘いわね、ジークフリード。甘やかすとつけあがって、手に負えなくなるわよ」

どんなに豪華な設(しつら)えが施してあっても、病院には病院としての匂いが伴う。特に診療室や病室には、そこが病院以外のなにものでもないことを示す、独特の臭気と雰囲気がまとわりつく。

フローラはすでに診療室から、入院患者用の病室に移されていた。最上級のホテルを思わせる調度こそ整えられてはいたが、消毒薬の匂いと腕から伸びた点滴用のチューブ、口許と鼻とを覆った酸素マスクが、フローラがホテルの客室ではなく、病室の客人であることを示して余りあった。

吹雪の中では蒼白を通り越して透明に近いほどに血の気をなくしていた顔色が、ヴェストパーレ男爵夫人に続いてキルヒアイスが入ってきたときには、淡く血の気を取り戻して微笑んだ。身体を起こそうとするのを、付き添っていた看護婦が慌てて押しとどめる。本人も無理を悟ったらしく、黒髪の頭を枕に沈めながら、それでもそっと顔を斜めに倒すようにしてキルヒアイスの姿を、その視線の先に追う。綺麗に整った白皙が、頬笑みに緩んで見えた。

「ジークフリード・キルヒアイス少尉、救けてくれてありがとう。そなたが救けてくれなかったら、生命がなかったと聞きました。そなたは生命の恩人です」

「いえ……その、ええと、つまり……」

貴族の娘にしては余りに素直な礼の言葉が、キルヒアイスを戸惑わせた。確かに、今現在の帝国を牛耳り、大きな声では決して言えないが、ラインハルトにとっての瞋恚の的となっている門閥貴族。その一員でないことは、男爵夫人からの話で理解している。とは言

え、フローラの口調は余りにも率直すぎた。丁度、六年前、ラインハルトにぶつけられたあの一言、『ジークフリードなんて俗な名だ』。あの一言を思わず思い出させるほどに、飾り気も、ましてや人を見下す権高さもない、ただ心のままに口にしたと思わせる一言が、キルヒアイスを驚かせた。

「では、もう二度と、一人でお屋敷を抜け出したりしないでください。今度はわたしが救けられるとは限りませんから」

口調が妙に説教じみたのは、ラインハルトとの最初の出会いを思い出したからかも知れなかった。フローラは微かに眉をひそめた。

「そなたはまだ一六なのでしょう？ 一六なら、私の弟と同い年です。私より年下なのに、まるで私の爺のような話し方をしますね。でも、少しも似つかわしくないのが不思議です。本当に一六なのですか？」

要するに若いくせに老けていると言いたいのか――キルヒアイスがもう少しひねくれた性格であれば、そう皮肉で応酬するところだったが、彼の応答はあくまで生真面目だった。フローラにも、彼の老成ぶりを揶揄する意思がないことも明らかだった。

「ええ、この一月で一六歳になったばかりです。でも、年下だからと言って、人の言うことを聞かないのはいけないです。外に出てはだめだと言われていたのでしょう。それを無視して外出したりするから、あんなことになるんです」

「分かりました。でも、一度で良いから、自由に外を歩いてみたかったのは本当のことです。何もなかったし、道にも迷ってしまったけれど、誰にも何も言われずに歩くのは楽しかった。楽しすぎて……歩きすぎてしまって。気がついたら、もうすっかり疲れてしまっていて――」

実際に何時間、歩いていたのかも分からないくらい歩いた。まるで夢の中のようだった。夢から覚めた瞬間、全身を押さえつける疲労と、全身を締め付ける寒気に気づいて立ち竦むしかなかった。あの森の端まで歩いてくるのがやっとだったのだ……フローラはすまなさげに身を竦める。

「だから……我が家に帰ろうとして道を見失ったのではなくて、自分がどこへ行こうとしているのかも分からずに歩いていて、それでも楽しかったと言ったら、きっとそなたは怒るでしょう？」

冷え切った身体が持病の致命的な発作を引き起こすに違いないこともフローラは理解していた。自分がどれほど愚かなことをしてしまったのか、その時になって初めて分かったのだが、もう遅い。絶望して立ち竦んでいる、その彼女の前に現れたのがキルヒアイスだった。

「別に怒ったりはしませんけれど……」

「それでそなたに酷い迷惑をかけることになってしまいました。もう、あんな我が儘は二度としません。だから、許してくれますか、ジークフリード・キルヒアイス少尉」

「許すも許さないも……」

何を許すのかよく分からない。キルヒアイスの心理は口調ほどには落ち着いていない。彼にとって年の近い、よく知っている女性と言えばアンネローゼ一人に限られていたし、アンネローゼは彼と彼の親友にとっては常に保護者だった。彼に向かって許しや救けを求めたことはなく、しかし、それ故に六年前のあの日、アンネローゼが最も救いを必要としたに違いないとき、それを与えられなかっ

たこと。ラインハルトのみならず、キルヒアイスにとって決して癒すことのできない心の傷だった。

生命を救うことになったのだから感謝されるのは、ある程度当然として、何を許してくれと言っているのか……戸惑いつつも、キルヒアイスは答える。

「二度と同じことをなさらないなら、許してあげます」

「ありがとう」

ほっとしたように、フローラは笑みを深くした。アンネローゼの端麗さには比較のしようがないまでも、絶妙の筆遣いで描かれたような形の良い眉と、深い漆黒の大きな瞳、艶やかなストレートの黒髪が白い肌と鮮やかなコントラストを描くその容貌は、十分なほどの美貌と言えた。

そう思い、キルヒアイスは彼女を初めて見たときの印象を思い出した。フロリアン・ゲールハルト……フローラの弟も、髪と肌の色合いの際だつ美少年だったのだ。フローラの容姿が、フロリアン・ゲールハルトの容貌に関する記憶を記憶の表層に浮かび上がらせた故の既視感（デジャ・ビュ）だった。

フロリアン・ゲールハルトが、幼年学校での彼らの旧友であったことを口にしようとして、キルヒアイスはその言葉を飲み込んだ。フロリアン・ゲールハルトが、姉に彼らのことを話していれば、キルヒアイスが名乗った時、フローラはすぐにそれと察したはずだった。彼らが同級生だったのは何年も前のことではないのだ。

「弟君がいらっしゃるそうですけれど、荘園には来ておられるのですか？」

特に意図があっての問いかけではなかった。辛そうに顔を歪めながら、フローラが枕に埋めた顔を背けたのが意外だった。

「弟は士官学校に行っています。幼年学校の頃からほとんど帰ってこなくて……」

仲の良い姉弟というわけではなかったらしい。アンネローゼとラインハルトのことを思い出し、キルヒアイスは思う。同じ姉弟とは言ってもいろいろあるものらしい、と。

ちょっと言葉を切ってから、フローラは視線をキルヒアイスに戻した。頬がさっきより紅潮していて、目が潤んで見えた。

「ありがとう、ジークフリード・キルヒアイス。そなたに会えて良かった」

もう一度、視線が逸れる。不自然なほどの速さで寝返りを打ち、毛布を身体に巻き付けるようにしたのが余分の刺激になったのかも知れない。フローラは再び激しい咳の発作に襲われた。

看護婦が幾つかの計器を操作し、高圧注射器をその二の腕に押し当てる。なお、身体を固く丸めて苦しがるフローラの背をさすってやりながら、看護婦はキルヒアイスたちの方を向いてかぶりを振って見せた。

「行きましょう。フローラも気が済んだでしょう。それに、もう、迎えが来ているでしょうから、フローラが落ち着くまで待って、それから連れて帰ってもらいましょう」

頷き、キルヒアイスは男爵夫人に従って病室を出た。ドアを閉める直前、意図するともなく振り返った視線にフローラの黒瞳が飛び込んできた。発作の苦しさからか、一杯に涙を湛えたその目は、それでも真っ直ぐにキルヒアイスを見詰めて離さなかった。息苦しくなるほどの凝視を、一瞬後、閉じる扉が遮った。

フローラを迎えに来たシュトレーメル伯爵家の執事は、アルベルト・テニエスと名乗った。一目見て、キルヒアイスはフローラが繰り返し『爺』と呼んでいたのが彼に違いないと思ったのだが、その直感に狂いはなかった。ほとんど禿げ上がった頭部の耳脇に、既に完全に白髪に変じた頭髪の名残をまつわらせた、この痩身の執事は、ヴェストパーレ男爵夫人が『もう良い、止めよ』と命じるのにもかまわず、『お嬢様の不始末』を繰り返し繰り返し詫び続けたのだ。

「フローラの容態が落ち着くまで、まだ一時間ほどはかかるようよ。あなたも一緒にお話を伺ってくれないかしらね」

若いハンサムな芸術家の卵たちならともかく、落ちぶれた伯爵家の、おそらくは過去を懐かしんで愚痴っぽくなっているに違いない老執事を相手にするのはどうにも気が進まない、などというのは口実に違いなかった。何のための口実かまでには、まだキルヒアイスの気は回らないのだが、とにかく男爵夫人ができる限り彼をここに足止めしようとしているらしいことだけは察している。実際、フローラにかけられた『迷惑』よりも、キルヒアイスとしては遥かにこちらの方が『迷惑』である。

が、アンネローゼの親友でもある男爵夫人の要請を無下にできるほどにキルヒアイスは冷淡でもないし、この年上の手強い貴婦人をうまく操縦できるほど、人あしらいに長けてもいなかった。

「お嬢様は、本当にお気の毒なお身の上なのです」

老執事と言うのがみんなこんな風なのかどうか、キルヒアイスの視野の及ぶところではなかったが、たしかにテニエスは男爵夫人の言うところの『愚痴っぽい、没落貴族の老執事』から一歩もはみ出してはいなかった。

「ほんのちょっとした冒険心と言うんでしょうか、自由に屋敷の外を歩き回ってみたい。そんな気分で、コートだけを持って抜け出されたようですよ」

フローラの口調からすれば、軽い悪戯心などと言っては余りに彼女の本心からかけ離れたことになるのだろうが、だからといって彼女が本当に何を望んでいたのか。真意を察している自信もキルヒアイスにはない。軽い気まぐれで、ほんの些細な悪戯を試みた結果、大事に至りかけたのだ。そう説明するのが、フローラにとっての親切ではないか。本当のことを語りたいなら、彼女自身がこの爺に語ればよいことである。

キルヒアイスの言葉は、しかし、意外なほどに老執事を納得させたようだった。あるいは、老執事自身、ある程度以上までフローラの胸の裡を察していたのかも知れない。

「さようでございますか……お嬢様がそのようなことを。さてしもあるべきことにございます」

「他家のことゆえに、私が口を出すことでないことは分かっています、ヘル・テニエス。宜しくて、フローラが望むなら、外出も許してあげてはどうなの。もちろん、あの身体だから、この冬に一人でと言うのは駄目でしょうけれど。勝手に屋敷を抜け出してうまくやれるほど、あの娘は機転の利く方ではなくてよ。今度は、このジークフリードが、ほんのたまたま通りすがったから救かったようなもの。次ぎに同じことがあったら、あなたはあなたのお嬢様の遺体を

引き取って帰ることになったかも知れないのよ」
「お叱り、重々、この胸に刻んでございます、男爵夫人。しかし、お聞きください、お嬢様は決してお幸せなお身の上ではございませんでしたし、これから先も、お幸せをお手にされるとは到底思えないお定めにおられるのでございます」
「くどいわ、ヘル・テニエス。私は言いました。他家のことだ、と。フローラの不幸を私に語ってどうしようというの。私にあの娘を救けろというのなら、それはお門違いというものよ」
「いいえ、そんな大それたことは申しません」
　誰かに話さずにはいられないのだ……老執事は、残りわずかになった頭髪の名残を空調の風にふわとそよがせる。何しろ、フローラは当主セバスティアン卿の正室の娘ではない。それゆえ、正室であるシュトレーメル伯爵夫人からは疎まれ、生まれついての病身と相まって、ながく帝都の伯爵邸には迎え入れられないで過ごしてきたのだ、と。
「奥様も昨年の暮れに亡くなりまして……」
　ヴェストパーレ男爵夫人は辛辣だった。
「呆れたものね。ろくに伯爵家の体面も保てないのに女に手を出すのだけは一人前というわけね。それで娘を外に作ったあげくに、奥方の顔色をうかがって、哀れな娘を家に迎え入れることもできない。奥方が亡くなったとたんに手許には引き取るけれども、外聞を恐れて荘園に住まわせておくなんてね。それでも、あなたの旦那様は男なのかしら……いいえ、そんなことはどうでも良いわ。フローラのこと、話したいのならお話しなさい。何かをしてあげることはできないと思うけれど、話だけなら聞いてあげます」
「はい……ご存じとは思いますが、旦那様にはフロリアン様という奥様のご実子がおられます」
　思わず、キルヒアイスは病室の方を振り返る。平凡すぎるほど平凡な平民の家庭に育ったキルヒアイスである。貴族の、複数の女性が当主の愛人となり、その子供達が母を異にするような状況は彼の想像の域を超えている。顔立ちから言えば、ラインハルトとアンネローゼほどではないにしても、互いを連想させるに十分なほどの容貌の相似を見せているフローラとフロリアン・ゲールハルトが異母姉弟である事実は、キルヒアイスにとっては意外に過ぎた。
「旦那様は、無理をせずとも今のまま伯爵家は保っていけると仰せになっていますし、実際、辛うじてシュトレーメル伯爵家は保たれて参っておるのでございます。ですが、フロリアン様は、今のままではいずれ伯爵家は決定的に没落する。何かしらの術をもってその名を上げるべきだとして、幼年学校から、今は士官学校にお入りになっておられます。旦那様は随分とご反対なさり、フローラお嬢様は旦那様とフロリアン様の間に立って、何とかお二人の仲をお取り持ちなさろうとしたのですが……」
「それが裏目に出て、かえってフローラが二人ともから疎まれるようになった。そういうことね？」
「さようにございます。フローラお嬢様が旦那様とフロリアン様の諍いをお諫めになってすぐに、旦那様はヴィンスティンゲン侯爵様がお申し入れになっておりました、フローラお嬢様への縁談を急にお受けになりました。ほんの半年前のことでございました」
「ヴィンスティンゲン侯爵？ ヴィンスティンゲン侯はもう六〇過

ぎの中年親爺よ。それに、四〇年来の奥方も健在のはずよ。一七や一八の女の子を愛人にでもするつもりなの？」

「いいえ、侯爵様ご自身ではなく、甥のコンラディン卿のご内室へというお話でございました」

執事が、『コンラディン卿』への好意を抱いていないことは明らかだった。握られた拳が微かに震え、抑えても抑えきれない怒りが、その老顔を赤く染め始めている。

コンラディン・フォン・ヴィンスティンゲン……その名が、再びキルヒアイスの記憶の底を開き、注意深く、その奥底にしまい込んであった旧い人名録のページを開く。フロリアン・ゲールハルトと同じく、彼とラインハルトの旧友たるべき人物。初対面で、ラインハルトに膝の裏の靭帯を踏み切られかけた後、ラインハルトを自らの特権を侵す敵対者として敵視し続けた、あの緩みきった輪郭の所有者。キルヒアイスにとっても、一〇代前半の最も不愉快な記憶の一部をなす人物である。

結局、コンラディン・フォン・ヴィンスティンゲンは幼年学校を卒業できなかった。彼らが幼年学校の四年を迎える直前、素行と成績、その両方での不良のゆえをもって放校されたのだが、伯父の名を憚った学校側の配慮で『退学』ではなくて『飛び級卒業』の扱いになったという。その後、コンラディンは、貴族子弟枠を使って帝立大学に入学した……らしい。当然ながら熱心でまじめな学生であり得るはずもなく、その私生活の乱脈さをほんのわずかだけだが帝都を流れる噂となってキルヒアイスの耳にも入っていた。

老執事の怒りの一半を、キルヒアイスは理解できるような気がした。アンネローゼが皇帝フリードリヒ四世の後宮に入ったこと。『後宮に入る』、その言葉の意味が具体的な内容を伴って理解に至った時の、あのたとえようもない不快感と怒り。あの時ほどの振幅には至らぬまでも、どこか似通った、酸味を帯びた不愉快さの波が胸底を満たすのを、キルヒアイスは確かに感じたのだ。

おそらくは、フローラの身辺で唯一、彼女を掌中の玉として慈しみ、その成長に期待していたのがこの老執事なのだろう。彼にとって宝とも言うべき少女が、長く貴族社会の執事の身分にあった彼にしてすら、許し難く思えるような低劣な人物に奪われようとしている。

「それで、フローラはこの縁談を嫌っているのね？　でも、ヴィンスティンゲン侯爵家と縁組みできるなら良い話ではなくて？」

男爵夫人の口調もまた、皮肉の響きを欠いてはいなかった。

「侯爵の甥御の内室なら、フローラも大変な出世よ。執事としては喜んであげるべきではなくて？」

「フローラお嬢様が、このお話をお喜びであれば、今日のようなことはございませなんだ。そうはお思いになっていただけませぬか、男爵夫人」

赫っと頬に怒りの血の気をさし上らせた執事に、ヴェストパーレ男爵夫人の表情も苦くなった。

「分かっているわ。でも言ったわよ、ヘル・テニエス。私たちにできるのは、あなたの愚痴を聞いてあげることだけ。セバスティアン卿がそう決められたなら、これは他家のできごとです。ヴェストパーレ男爵家として口を差し挟む権利も、義務もない。ただ、言えるのは、フローラの身の上に同情してあげることのできる人間が二

人増えた。それだけよ。それでは不満かしら?」
「は――はい、いいえ、とんでもございません。お嬢様をお救け頂き、その上に、埒もない老人の愚痴まで聞いていただきました。お願いすべき筋でもございませんが、フローラお嬢様のことを、心の隅にだけでもお留めおき頂ければ、と、ただそれだけにございます」
侍医と、フローラについていた看護婦が、彼女の容態が十分に落ち着いて、シュトレーメル伯爵家の荘園への帰宅に耐えられる状態になったと告げたのはその直後だった。
テニエスは、荘園から差し回してきた地上車にフローラを迎えることを主張したが、万が一を危惧したヴェストパーレ男爵夫人が、彼女の侍医に所有させている救急用搬送車……要するに救急車……で、ホバー・ベッドごとフローラを運ぶことを提案し、結局、テニエスの受け入れるところとなった。
ラインハルトの機嫌が気にならなくもなかったが、結局、キルヒアイスはフローラがホバー・ベッドごと救急用搬送車に載せられるところまで付き合うことにした。無論、男爵夫人からの慫慂だけなら何とか言い抜けて帰宅の途に就いたところだったが、フローラ自身からもう一度だけ『ジークフリード・キルヒアイスにお礼を言っておきたい』と言われては、断りも難しかった。キルヒアイス自身、自覚はしているのだが、どうしても『面倒見が良すぎる性格』であることは否定しようがない。
ホバー・ベッドに横たわったフローラは、既に随分顔色も回復し、点滴のチューブも酸素マスクも外されていた。目許が酷く赤く腫れていたのは、発作の苦しさが涙を溢れさせた名残かも知れなかった。ベッドの上から、フローラは手をさしのべ、戸惑いながらも男爵夫人に促されたキルヒアイスはその手を取ってやった。
「ありがとう、ジークフリード・キルヒアイス。そなたのことは忘れません」
発作の名残か、その声は低く掠れていた。一瞬、何を口にして良いのか分からず、キルヒアイスは絶句する。ひやりとするほどに体温の低い、繊細な指先がしっかりと彼の手を握りしめてくるのにもどうして良いか分からず、しばらくそのままで棒立ちになってしまった。
いくつもの言い回しを……と言っても、一六歳の少年に可能な範囲には違いなかったが、脳裏で繰り広げて、やっと言葉に変わったのは最も平凡な一言だった。
「いいえ、当然のことをしたまでです」
わずかに重苦しい思いに胸の裡を捉えられるのを、キルヒアイスは敢えて無視した。ホバー・ベッドが救急用搬送車の後部から運び入れられ、そのドアが閉じるまで、フローラの目が限界に近いほど丸く見開かれ、一瞬たりとも離すまいと言わんばかりに、その黒瞳に彼の姿を映し続けているのには、この時のキルヒアイスはついに気づかなかった。既に、かれの脳裏はリンベルグ・シュトラーセで彼の帰りを待つ金髪の親友に占められていたのである。

フローラ・フォン・シュトレーメルに関する事件は、無論、キルヒアイスからラインハルトに報告されることになる。フローラとコンラディン・フォン・ヴィンスティンゲンの縁組みは、キルヒア

イス同様に、後宮に拉致された姉のことを思い出させたらしく、その秀麗な表情に苦いものを走らせた。だが、ラインハルトの出した結論もまた、キルヒアイスのそれとわずかでも違いがありはしなかったのだ。

「男爵夫人は良いことを言った。フロイライン・フローラは確かに気の毒かも知れないが、男爵夫人の言う通り、俺たちにとっては所詮『他家の事情』だ。俺たちには俺たちの事情があるし、それは誰にも助けてもらうことはできないんだからな」

彼らの事情……ゴールデンバウム王朝を倒し、アンネローゼを後宮から、その本意に染まぬはずの境遇から救い出す。その目的のためには、薄幸な一人の貴族の娘を気にかけている余裕はない。ラインハルトの結論は正論であったし、キルヒアイスに異論を差し挟む余地はあり得なかった。

そして、コンラディン・フォン・ヴィンスティンゲンとフローラ・フォン・シュトレーメルの間に婚姻が成立したこと、ヴィンスティンゲン侯爵の意向によりツィンメルマン子爵家が新たに立てられ、コンラディンがその初代の当主となったこと。二人がそれらの知らせに接するのは、亡命を図ったヘルクスハイマー伯爵を自由惑星同盟に追う、困難な極秘任務を終えて帝都に帰還してのちのこととなる。この一年余り後、帝国暦四八四年二月のことだった。